

未来の家族のために堅実経営 搾乳ロボット導入のため、今は貯金

継承した施設は、フリーストール牛舎、60頭の乳牛（うち搾乳牛は50頭）、牧草地30ha、そして家屋。国の助成金のほかにも、中標津町では新規就農時の営農経費の補助や、生活や経営安定に必要な資金の無利子貸付などがある。また、JAけねべつでは新規参入時、新規就農継続対策補助などがあり、就農前には規模や経営計画に応じて親身になって相談に乗っている。

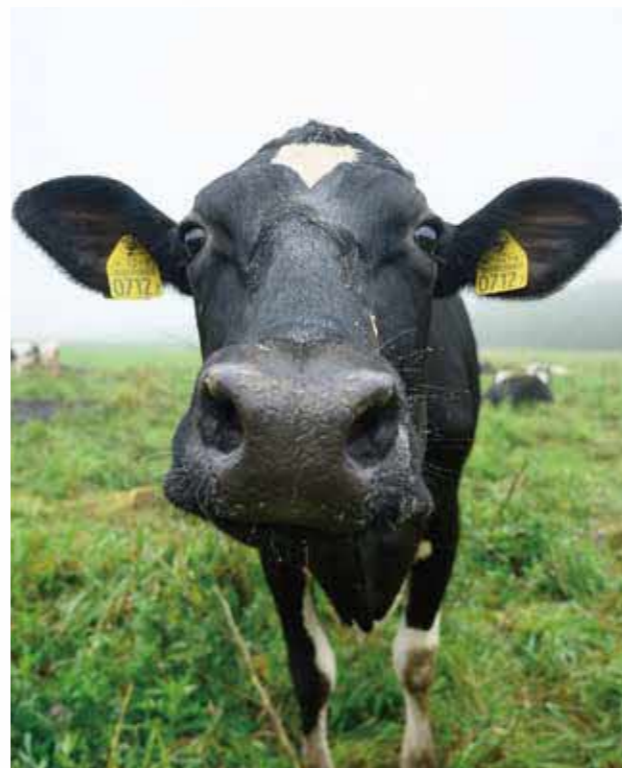
「就農でお世話になったJAの担当者の方が、お金に堅実な方でよかったです」と盾哉さん。過剰な投資をさせず、あるものを最大限に活用する。

牛の餌は、JAけねべつが運営するTMRセンターに依頼。良質な餌が配送されることで、1頭当りの乳量を上げ、収入増につなげている。

将来像も明確だ。「将来の子育てに備えて、労働力が軽減できるように機械や搾乳ロボットを導入したい」と経営者意識の高い朱音さん。搾乳ロボット導入と同時に搾乳牛を120頭以上に増やしたいと考え、「今は貯金する時」と堅実さをみせた二人。ゆくゆくは、農業を「もっと稼

げる仕事にしたい」と考えているからだろう。

牧場での日常を配信しているSNSやYouTubeのコメントの中には批判的なコメントもあるようだ。「就農のハードルを高くしないように、楽しさを伝えていくけど、誤解されることもあって…。それでも地域の人やJAの人にも助けられて、ここまでやって来られました」と盾哉さん。経営コンセプトは「牛も人も笑顔で」。YouTubeチャンネル「ぶくぶくファーム」には、その想いが満ち溢れていた。



酪農をはじめるまで

- 2016年 1月 農業フェアに二人で行く。JAけねべつの職員に出会う
- 8月 1週間の農業体験で別海町へ。北海道への移住を決意
- 11月 盾哉さん単身で研修へ
- 2017年 4月 朱音さん大学卒業後、北海道へ移住し研修
- 2019年 4月 新規就農。小林牧場を設立
- 2020年 8月 YouTubeチャンネル開設

小林牧場の入口にあるお気に入りの看板。この横には樹齢100年は超えていそうなカシワの木がそびえ、牧場のシンボルになっている



「どう生きるか」を 考えた先にあったのは、 北海道“と”農業“だった



CASE2

伊達市
山本七瀬さん 章夫さん
ご夫婦

自然とふれあう子育て環境や 支援制度を事前にくまなく調査

都市の便利さを享受したい人、自然の中でゆっくりと時間を楽しみたい人など、年齢や立場によって考え方はさまざまだ。伊達市で新規就農した山本さん夫妻は、自然とふれあう生活を求めて北海道へ移住した。「名古屋市内のマンションで子育てを始めたとき、次第に何か息苦しさみたいなものを感じていたんです。子どもを自然の多いところで自由に遊ばせたいと思うようになりました」と七瀬さんは当時を振り返る。

七瀬さんは20代の頃にカナダなどへ語学留学を経験。その留学先を紹介する代理店で章夫さんと出会い、のちに結婚した。子どもが2歳になる頃から、移住を考え始めたという。一方、章夫さんは「2011年に東日本大震災が起きた頃から、留学関係の業界は次第にかげりが見え始めていると感じていました。留学や旅行に関連する仕事をしつつ、物質的には豊かな時代と言われているはずなのに、心の貧しさのようなものを感じていました」と語る。二人の思いが具体性を帯び始めたのは、2016年。それか



ら2年の月日をかけて話し合い、北海道への移住と、定年を意識せず長く続けられる「農業」を仕事にするという選択をした。候補地選定の段階では、子育て支援制度や医療体制の充実度をチェック。市街地が近く、道内でも気候的に温暖な伊達市に絞り、家族で現地を見学した。「役所の人に会い、実際に新規就農された方の農場も見せてもらいました。事前の下調べとの相違もあまりなく、移住への不安は全くなかったですね」